

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370187

研究課題名(和文) ロシア革命期における記憶芸術とその影響

研究課題名(英文) Memorial art works in the Russian Revolutionary era and its influence on contemporary Art

研究代表者

江村 公 (Emura, Kimi)

大阪市立大学・大学院文学研究科・特任講師

研究者番号：50534062

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ロシア十月革命の記念と追悼をめぐる議論に着目し、芸術研究機関での「記念碑」の定義や芸術組織の運営活動に関するアーカイブ資料の収集・検討を行なった。そして、革命後のサンクト・ペテルブルクでの美術館コレクションの再編成が、都市の文化的記憶の変容につながっていることを示した。当時の文化的記憶の再組織化は単純な過去の破壊に基づくものではなく、過去の記憶の継承とのほざまで不安定なものであった。このことを踏まえ、1920年代の造形芸術作品における記憶の現前化や記憶を芸術によって公共化する方法を考察し、革命期の芸術が現代の「モニュメント」「インスタレーション」作品に与えた影響も明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to explore the cases of realization of memories to the monumental art works in the era of the October Revolution, analyzing the archival materials and the art works of the Memory at that time.
And focusing on the discussion about the Commemoration of this historical event and Mourning for victims of the struggle for accomplishing it, the inquiry suggests that the official art policies as the result of the discourse reflect on the transform and redefinition of the cultural memories after the radical social change at the beginning of twentieth century in Russia. But the will of reorganization of memories was precarious, because it was not so easy to negate absolutely the memory of the past.
Also this research investigates the modern art and contemporary art works in terms of the forms of Monument and Installation, considering the processes of sharing the historical memory including the negative or tragic one by making and constructing memorial art works.

研究分野：近現代芸術およびロシア文化

キーワード：ロシア・アヴァンギャルド 近代芸術 記憶文化論 現代アート ロシア革命

1. 研究開始当初の背景

1990年代から、ソ連の崩壊、EUの統合などを経験したヨーロッパでは、歴史と「記憶」をめぐる研究がさまざまなかたちで行われてきた。ピエール・ノラによる「記憶の場」をめぐる著作集の編纂(1984年)や、アライダ・アスマンの『想起の空間—文化的記憶とその変遷』(1999年)などが代表的研究として挙げられよう。特に後者は、モーリス・アルヴァックスの著作『集合的記憶』(1950年)の再評価を行いつつ、芸術作品が文化的記憶の形成において重要な役割を担ってきたという観点から、文学だけでなく、造形芸術の分析も行っている。加えて、20世紀の国民国家の基盤となりうるような「集合的記憶」と、プライベートな「個人的記憶」の関わりについても議論している。アンドレアス・ヒュイッセンは、記憶と場所の問題や現代の記念碑についての研究を通して、公共性と集合的記憶の問題を明らかにした。ユダヤ研究で知られていた、ジェームズ・E・ヤングは、「記念碑」の社会的効果を議論するなかで「カウンター・モニュメント」(対抗記念碑)の概念を提起した。また、我が国では、ドイツ研究の枠組みでの記憶と芸術の繋がりに関して、香川檀『想起のかたち—記憶アートの歴史意識』(2012年)が出版された。この著作は先に挙げた先行研究を踏まえながら、そこでは十分に扱われなかった作品(レベッカ・ホルンなど)を「記憶アート」と呼び、記憶の「痕跡探し」をキーワードに「歴史の表象」の方法が考察されている。

ロシアにおいて文化と記憶の問題に関しては、文化記号論の立場から(ロトマン/ウスペンスキー)あるいは、文化心理学の文脈で検討されてきたが、芸術作品と文化的記憶について論じた研究は決して多くはなかった。

このような欧米で活発になされた議論の枠組みを参考にしながら、本研究は20世紀のロシアにおける「記憶」とその表象について検討する。

2. 研究の目的

本研究は、「記憶」と「想起」をキーワードに、1920年代ロシアの造形芸術作品の分析、および、芸術研究機関での「記念碑」の定義や芸術組織の運営活動の調査を通して、記憶の現前化を考察するものである。創作と議論、教育活動に関するアーカイヴ資料の収集・検討を行い、20世紀初頭の近代美術の文脈での作品を通じたメモレーションに関する議論とその影響を明らかにすることを目的とした。さらに、現代における「モニュメント」や「インスタレーション」の形式を手がかりに、負の経験も含めて記憶を芸術によって公共化する方法についても検討する。

3. 研究の方法

出来事を記念する「記念碑」の建設とその

効果について、どのような議論が交わされていたのか、出版された資料とモスクワ、ペテルブルクに所蔵されている公文書の文献調査によって明らかにする。あわせて重要な資料の整理と翻訳を行い、その成果をまとめ発表する。これらの資料を踏まえ「記念碑」や「記憶のアーカイヴ」としての美術館が文化的記憶にどのように関わっているのか検討する。実際に建造された記念碑や芸術作品の分析も行う。こうした遺産がどのように現代へと受け継がれているのかについても、国際美術展の視察を通して明らかにし、現代アートへの影響を考察する。

4. 研究成果

(1) 平成26年度

本研究の初年度である平成26年度は、8-9月に海外での資料調査・視察を行なった。ペテルブルクでは、エルミタージュ美術館コレクション創立250年記念にあわせてロシアで初めて開催された「マニフェスタ10」を視察した。モスクワでは「マニフェスタ10」に連動する現代アートの展覧会、マネージュでの第一次世界大戦の記憶に関する大規模な展覧会や、イギリスのコレクションによる第一次世界大戦時の記録写真についての企画展示を実見した。さらに、ロンドンのテート・モダンではマレーヴィチの回顧展を訪問した。《黒い四角形》が始めて公開されてから、ほぼ100年、メモリアルという観点からは、きわめて重要な企画展であった。こうした展覧会の実見と資料収集の成果を踏まえ、表象文化論学会で1917年の革命直後の記念碑をめぐる論争について口答発表を行なった(学会発表)。

くわえて、ドイツの現代アーティストであるイザ・ゲンツケンへの「歴史的アヴァンギャルド」の影響を考察し、そのインスタレーションの形式とメモレーションの方法について論じた研究ノートを京都造形芸術大学紀要に発表した。ゲンツケンのインスタレーションが従来の彫刻の文脈、そしてロシア・アヴァンギャルド、とりわけエル・リシツキイの作品と理論に影響を受けているというその根拠を明らかにできた(発表論文)。

平成26年度末には、次年度8月に行なわれる国際学会での研究発表テーマについての資料を、おもに早稲田大学と国立近代美術館や東京都現代美術館の資料室で収集した。

(2) 平成27年度

平成27年度8月に幕張で開催されたICCES(International Council for Central and East European Studies)で、画家マレーヴィチの晩年の農民像にみられる個人的記憶と集合的記憶に関する口頭発表を行なった(学会発表)。さらに、表象文化論学会ニュースレター《REPRE》で、前年度視察を行なったサンクト・ペテルブルクでの芸術祭

「マニフェスタ10」の報告を投稿した（その他）。本稿は、ソ連時代の記憶、90年代のペテルブルクのアート・シーン、革命時の忘れられた記憶について論じた。さらに、大阪市立大学紀要『人文研究』に、1917年革命前後の都市装飾、および戦時共産主義時代の記念碑性の意義についての論考を投稿し、掲載受理された（雑誌論文）。本論文では革命記念の都市の装飾が既存の景観を破壊することなく行なわれ、そこでの建築物や記念碑を隠す、覆うといった方法が、現代アートの大規模インスタレーションに影響を与えていることを明らかにした。

一方、出張・資料収集については、平成27年度夏期、トルコでのイスタンブール・ピエンナレ、ロシアでのモスクワ・ピエンナレを視察した。前者は第一次世界大戦中のアルメニア人に対する虐殺の出来事を記念し、また、トロツキイが亡命後に滞在していた場所が作品展示に使われており、記憶文化という観点から重要であった。後者では、ソ連時代の共同性の再考が主題となっており、過去の記憶を現代アートがいかに表現しているかという点で、理解が深められた。さらに、年度の終わりには、モニュメンタリティの現代性の考察において本研究で重要な位置を占める、イザ・ゲンツケンの個展をアムステルダムで視察し、ロシア・アヴァンギャルド作品の重要なコレクションを持つアムステルダム市立美術館でマレーヴィチに関する資料調査を行なった。

（3）平成28年度

平成28年度、9月には上海のEast China Normal Universityで開催された第7回East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studiesで、英語による口答発表を行なった（学会発表）。本発表はロシアと日本の間の境界地域、特にサハリンをめぐる歴史的記憶をめぐって、現代の日本のアーティストたちがどのような表象を行なっているか、また、視覚的イメージをとおして境界地域の過去と未来をいかに映し出そうとしているのか、歴史的記憶と芸術家の想像力の関わりを問う、記憶文化の理論的側面の考察である。

さらに、国内では12月に日本ロシア文学会関西支部秋期研究発表会にて、口頭発表を行なった（学会発表）。これは美術館をひとつの「記憶の場」とみなし、革命後の新しい美術館創設とそのコレクション形成において、文化的記憶の書き換えがどのように行なわれたのか、その初期の試みを明らかにすることを目的とした。

資料収集の面では、平成28年度2月に、北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センターにて、十月革命前後の芸術雑誌のマイクロフィッシュの中から、美術館や芸術制度に関する記事を確認した。また、年度末3月のロシア出張において、革命後のロシア美術館再編の際に現代アート部門を創設した美術史家ニ

コライ・プーニンに関する資料に焦点を絞り、個人アーカイブを管理している遺族に面会し、貴重な資料の一部の提供を受けた。

（4）最終年度

本研究の最終年度にあたる平成29年度は、今まで集めた資料の整理におもに時間を割いた。その資料収集の成果の一端を日本ロシア文学会全国大会で発表した（学会発表）。本発表は革命直後の文化行政と美術館コレクション再構成における美術史家ニコライ・プーニンの役割を現代的な「アート・メディエーター」（仲介者・媒介者）の観点から再考したものである。

研究期間を通して収集してきた資料を踏まえた上で、ロシア革命が生まれた街でもあるサンクト・ペテルブルクの20世紀初頭の文化生活の記憶に関する論文集の翻訳の計画を立てており、その目次の検討に取りかかった。この翻訳はロシア・アヴァンギャルド芸術の擁護者であった批評家プーニンの十月革命をめぐる回想と日本滞在時の日記の一部、ロシア美術に関する未発表論文で構成される予定である。この年度の9月と3月のロシア出張の際に、再度プーニンの孫に面会し、日本語訳の目次についても助言を受けた。また、流刑地で処刑されたプーニンの遺族の個人的な記憶と歴史的記憶との関わりについて聴く機会にも恵まれた。

（5）総括と今後の展望

研究遂行の過程で、十月革命後の文化政策の中で重要な役割を果たした芸術学者プーニンの遺族に面会できたことは、本研究の方向性に大きな影響を与えることになった。プーニンの孫であるアンナ・カミンスカヤは生前の彼を知る唯一の親族であり、その個人アーカイブを管理している。彼女もまた芸術学の研究者であり、プーニンが生前記した批評集をまとめ、テート・ギャラリーでのロシア・アヴァンギャルド展にも協力し、プーニンと日本美術に関する研究を発表している。平成31年秋にも未発表の論文をまとめ出版する予定である。プーニンの遺言により出版が差し控えられていたこれらの論考が発表されれば、今後のロシア・アヴァンギャルド研究に与える影響は少なくない。

またカミンスカヤとエルミタージュ美術館の学芸員でもある彼女の息子ニコライ・ジコフは連名で、プーニンが1927年に東京・大阪を中心に開催された「新ロシア美術展」のために来日した際の日記を踏まえた、注釈入りのロシア語論文を発表している。プーニンは画家矢部友衛とともに来日したことが知られており、この来日は日本の大正新興美術の展開に大きな影響を与えたとされるが、その詳細は明らかになっておらず、カミンスカヤらの研究はソ連初期のロシアと日本との芸術交流の一端に新たな光をあてる鍵になることが考えられる。

こうした研究交流をきっかけに、平成 30 年 6 月 15 日から同年 8 月 19 日まで、サンクト・ペテルブルクのアンナ・アフマートヴァの家博物館にて開催されるアーカイヴ展示に向けての調査に協力した。今回の展示は、この博物館のプーニン旧蔵の日本関連の資料を公開することで、ロシアと日本の芸術を通じた交流を紹介するものである。本展覧会準備に際して、1927 年東京朝日新聞の主催により日本で開かれた「新ロシア美術展」カタログに掲載された批評全文、展示品リストをロシア語に翻訳した（その他）。この展覧会は 20 世紀初頭のロシア前衛芸術における日本美術への関心を再考することを促すとともに、一般市民の日露文化交流に対する理解に寄与することが期待される。

このように本研究は当初十月革命をめぐる「記憶文化研究」という比較的マクロな視点からの理論の考察を含む計画であったものの、結果的にはサンクト・ペテルブルクを中心とする地域に密着した「場所の記憶」をめぐるものへと変化していくことになった。その過程で日露の文化交流という観点からも、芸術研究を通じた「記憶文化」をめぐる研究をすすめていく必要性を実感した。今後は 20 世紀初頭の文化的記憶をプーニンの足跡をたどりながら明らかにするとともに、次世代に語り継ぐための資料の翻訳・紹介を通じて、プーニンの日本滞在の記録や日本美術の批評の翻訳に取りかかっている。さらに、今回の研究協力での調査をロシア語でも発表することを計画しているが、こうした研究活動は、日本の前衛芸術におけるロシアからの影響に関する研究の空白をうめるとともに、ロシア側の日本文化のさらなる理解に貢献できるはずである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

江村 公「総合芸術とアジテーションのはざまに」大阪市立大学文学研究科紀要『人文研究』第 67 巻、2015 年、141-161 頁。
（査読あり）

江村 公「視覚的表象と歴史の出来事をめぐる問い—若手研究者の三冊のアヴァンギャルド論」、『ロシア語ロシア文学研究』第 47 巻、2015 年、249-262 頁。
（査読あり）

江村 公「出来事を記憶にとどめる形式—イザ・ゲンツケンのインスタレーションを中心に」京都造形芸術大学紀要『GENESIS』第 18 巻、2014 年、166-180 頁。
（査読あり）

〔学会発表〕(計 5 件)

江村 公「メディエーターとしてのニコライ・プーニン—十月革命後の芸術組織再編のなかで」ロシア文学会全国大会、上智大学、2017 年 10 月 14 日。

江村 公「記憶の場とその書き換えの試み—ロシア・アヴァンギャルドと美術館—」日本ロシア文学会関西支部秋期研究発表会、天理大学、2016 年 12 月 3 日。

Emura, Kimi. “Imagination on the (no) borders—Representations by Japanese contemporary artists on the Northern border Territory”, The 7th East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies, East China Normal University, 2016-09-24.

Emura, Kimi. “The Return of Images from the Past: Reconsidering the Post-Suprematist Painting of Kazimir Malevich”, International Council for Central and East European Studies, 神田外国語大学（千葉県千葉市美浜区）、2015-08-05.

江村 公「総合芸術とアジテーションのはざまに—ロシア十月革命後の記念碑論争」第 9 回表象文化論学会研究発表集会、新潟大学五十嵐キャンパス(新潟県新潟市)、2014 年 11 月 20 日。

〔その他〕

江村 公、サンクト・ペテルブルク、アンナ・アフマートヴァの家博物館でのアーカイヴ展示「日本におけるロシア芸術（仮）」への調査協力・日本語からロシア語への資料翻訳（2018 年 6 月 15 日から同年 8 月 19 日開催）ニコライ・プーニン「現代ロシア芸術界の主潮と作家」1-4 頁、デヴィッド・アルキン「ロシアの農民芸術」4-6 頁、『ロシア展』カタログ、東京朝日新聞社、1927 年。

江村 公「忘却された複数の いま・このために」
<https://repre.org/repre/vol24/note/01/>

6. 研究組織

研究代表者

江村 公 (Emura, Kimi)

大阪市立大学・大学院文学研究科・特任講師
研究者番号：50534062